

## 財務常任委員会協議会

- 1 日 時 平成 30 年 7 月 17 日 (火)  
午前 10 時～午前 10 時 39 分
- 2 場 所 第 3 委員会室
- 3 出席議員 (委員長) 関戸郁文 (副委員長) 宮川隆  
(委員) 櫻井伸賢、大野慎治、鈴木麻住、塚本秋雄、相原俊一、  
鬼頭博和、須藤智子、梅村 均、梶谷規子、木村冬樹、  
堀 巖、伊藤隆信
- 4 欠席委員 なし
- 5 事務局出席者 議会事務局長 隅田昌輝、同統括主査 寺澤顕
- 6 委員長あいさつ
- 7 協議事項

### (1) 政策提言について

関戸委員長：テーマが真政クラブから 6 つ、創政会から 1 つ出ている。創政会のものはデマンドタクシーについてということで被っているので、資料のとおり 6 テーマが提出されていることになる。また、事前に総務・産業建設常任委員会と厚生・文教常任委員会それぞれから閉会中の継続審査事項として 3 テーマが提出されており、真政クラブから提出されたテーマのうちの 3 つが被っている。デマンドタクシーと桜保全事業が総務・産業建設常任委員会、子育て送迎ステーションが厚生・文教常任委員会と重なっている。財務常任委員会としては残りの 3 テーマを課題として取り上げてはと考えている。

大野委員：行政評価や政策評価の項目を 9 月の決算議会の前に行うというテーマの洗い出しと政策提言とをごっちゃにはいけないと思うが、行政評価のテーマはほかの会派は挙げてこないのか。政策提言をいきなりやるのではなくて、行政評価や政策評価の項目だということで真政クラブは出したが、常任委員会の協議事項と決算で行政評価、政策評価するということとごっちゃになっている。まず、政策評価を今年、試行的に行うということとは違うのか。

宮川副委員長：確かにそういうことだと思うが、皆さんが共通の意識としてこれに取り組んでいるのかということそうではない。政策評価と提言というものが頭の中で同じ次元で動いていると思う。その辺をちょっと整理していただいたうえで、どこでどういうふうに進めていくのかということを決めていただければよいのではないか。

須藤委員：先ほどの委員長の発言のとおり総務と厚生委員会の分と重なっているとのことだったのでその分は外して、担当の委員会でやってもらった方がいいと思う。

宮川副委員長：ということは、総務と厚生在所管事項に関しては、今回の行政評価の項目から外すということで進めるということか。

堀委員：大野委員が言ったように、これまでに決めたことというのは、それぞれの委員会は所管事項の中で政策提言、最終的には委員会代表質問につなげていくとしている。財務は事務事業評価、行政評価のうちに施策評価や政策評価といった分類があるが、まずは、財務常任委員会で事務事業評価を細かい事業ごとに試行的にやるという方向性でこれまできたのではないか。そのあたりをもう一度おさらいで押さえておきたい。

梅村委員：堀委員の言うとおりの流れだったと思う。その中で視察を行うことや、例えば事務事業評価の中でやりましょうと言っても事務事業の資料はどこにあるのかとか行政にあまり負担をかけてはいけないのではないかという意見があった。何か今一つやり方がきちんと把握できなくて、そういう状態の中で事務事業評価として一応抽出しましょうかという流れだと思う。どこから抽出したらよいかもよくわからなくてあやふやになっていた。

大野委員：総務、厚生政策提言と言うが、今回は行政評価である。10項目程度の事なら議長の下で行政評価シートをいただいて、その部分について評価していくといったことで、部長決裁後、三役説明以前のものが7月いっぱいごろにはできているそうなので、すべての事業ではなくて抽出した中である程度、10テーマ程決めたら事前をお願いして議長の下でいただくということ。今回は抽出だと考えているが、総務と厚生に分と言ったらすべてのものが引がかかってくるので財務でやるのがなくなってしまう。それは違う。これはあくまでも政策評価や事務事業評価といったことを評価すること、財務で今年は試行的に10項目程度以内で抽出していこうということだったと思っている。

宮川副委員長：なかなか頭の中で整理できていないので間違いがあれば訂正してもらいたい。あくまでも財務常任委員会の行政評価というのは、財政面を中心として費用対効果が適切なのかということや執行機関が作るチェックシートに基づいて議会としてこれでよいのかというような一定の評価をしていく。常任委員会の政策提言というのは今ある課題に対して議会や委員会として今後どのように進めていくべきなのかということを示唆するという位置づけで提案していくという感じで捉えている。行政評価の項目に対して議会として、財務委員会としてどのように取り組むのかということが課題という理解をしている。

木村委員：総務と厚生委員会の委員会が政策提言で財務常任委員会が事務事業評価だという認識はない。財務常任委員会で政策提言として挙げるということであれば、あることはあると思うがやはり中心課題となるのは総務・産業建設常

任委員会や厚生・文教常任委員会でやるものという意識で挙げなかったという判断があってもよいのではないか。

塚本委員：僕の考え方だが、事務事業評価を含めて行政評価というのは、昔一度やったことを思い出すとそれぞれに評価項目がありそれについてやっていくのが行政評価あるいは事務事業評価であり、今度飯田市へ視察に行くこともしかりだと思う。基本的にはすべてのことをやるということではなくて、決算をやってそれを予算につなげていく。そのサイクルの中で、決算で出てくる事業評価、行政評価、主要施策の成果を見ながらやっていくということである。ところで須藤委員、決算（監査）は終わったか。

須藤委員：まだである。今月中に行う予定である。市長が 25 日だったと思う。

塚本委員：僕は、その中にたくさんあるだろうと思う。28 年度の成果報告書も持ってきているが、基本的にはこの中からの選択になってくるのではないかと思っている。それは、決算をやった中で決算から出てくるものということで、今回、抽出は早かったが、出せと言われたから出したがこれはこれとして、普通の議会報告会なりふれあいトークで出てきたことを含めての部分も若干入ってきているだろうということも意識している。そういう意味合いで言うと総務と厚生はそれなりの中でそのメンバーで考えた閉会中の調査項目とできれば将来的には委員会の中で当局に提案していくような流れで持っていく。やはり財務常任委員会をつくったときには、予算決算を一本にして全員で事業を評価してその時に 20 も 30 もできないと思うから絞り込んでいく。それで去年も試行的、今回も試行的、おそらくまだ飯田市へ行っていないので試行的になるのかなという感じでいいのではないかと僕は思う。

須藤委員：試行的ならそんなにたくさんやらずに少しにして集中して行ってはどうか。

梅村委員：項目を出すのが少し早かったということを経本委員も言われたと思うが、僕も感じていた。どちらかという項目を挙げて何かやってみながらやるというよりも評価シートをどうするのかとか、執行機関で作ったものを評価するとか、それでもの足りなければ議員のほうでオリジナルのシートをつくるのか、つくるならばどういう項目にするのかなどを飯田市に行った後に話して仕組みを作り上げる一年でよいのではないか。

堀委員：たしか前回、私が、平成 17 年当時にやっていた事務事業評価シートがあるので、それを参考にもう一回見てみたらどうかと提案したはずだが。

塚本委員：今、梅村委員が提案したことは、やってきていて途中で止まっている。一番いいのはその時に事務局長がしっかりして、どこまで進んでどうだったかを資料として残していればよいのだがそれがわからなくなっている。それで木村委員がそのところになったが、やりにくいのはその辺りじゃないか

と思っている。事務局の下で資料をしっかりとまとめて、出してもらってやる。飯田市に行く前にやる。行った時の資料もあるだろうし。大事な経過はあると思う。そういう基本はやらなければならないと思う。基本はやらなければならないが、よそがやっているところを見て、須藤委員が言ったように10個も20個もということにはならないと思うが、絞り込んでやっていくことは大事じゃないかと思う。

梅村委員：堀委員の平成17年度の事務事業評価の資料を確かにいただいているが、今はもうやっていないもので施策評価になっている。

関戸委員長：時期尚早という話があった。飯田市にもう一度視察に行って研究するということと過去にやっていたものも僕は知らないので勉強させていただいて、検証が終わった後にその結果を踏まえてもう一度抽出もしくは進め方についての協議会を開きたいと思う。今の状態だと進められないような気がする。今の提案についていかがか。

須藤委員：17年の評価シートを探してもらって。

関戸委員長：皆さんに配らせていただく。

堀委員：なぜ財務の協議会で行政評価を行うのかを全員で今一度再確認し、共通認識として押さえておきたい。飯田市に行くのもやはり決算、予算というサイクルを議会における政策形成のサイクルとして確立するところが先ほど塚本委員も言われたように大事なところである。過去の主要施策の成果報告書を毎年見ていただくとわかるが、実際は過去の焼き写しのようなどころが多い。また、評価にしろきちんと評価されていない項目が多いし、どちらかというとマイナス面のことはあまり書かない。そういうことをきちんと議会サイドとしても見る。さっき、費用対効果という話も宮川副委員長からも出た。費用対効果も指標のひとつであるが、いろんな角度から、財務だから費用対効果だけかということとそうでもなくて、成果指標なりアウトプットの指標なりを羅列しながら議会として過去の事業をどう見ていくか、そして来年度の予算にどうつなげるのかということが財務の仕事であって、かたや総務と厚生常任委員会というのは、未来における新しい施策だけではなく、過去のもを改良してこうしていくべきだという政策提言もあるが、未来志向的な要素が強いのだろうなと思っているので、そこら辺の共通認識はやはり15人の中で持つべきだと思う。

大野委員：29年度の決算なので新規事業は既に公になっていて、我々も予算書や資料でいただいております、それを抽出することなのでこれはそんなに困難なことではなく、もうわかっていることを評価するということである。今年度のことを評価するわけではなくて、29年度の評価であるので、これをすることはそんなに難しいことではないと思っている。

関戸委員長：今、共通認識の話が出た。

宮川副委員長：堀委員が言われた内容で今後進めていくことが基本になると感じている。ただひとつ危惧するのが、前年度予算に対する評価、政策に対する評価なので委員長が言うように今度飯田市に視察に行って、具体的な取り組みを確認したうえで、その時点で今回出たような課題をピックアップして資料として出してくださいと言ったときにタイムテーブル的に執行部に無理がないのであれば委員長が言うとおりの進め方が今一番、皆さん具体的に取り組んでいけるのかなと思う。その後の執行機関への依頼で、執行機関に負担がかからないのであれば委員長提案で良いと思う。

塚本委員：特にといいことはないが、梅村委員と宮川副委員長が使った言葉の中に当局に無理がないとか負担という言葉が使われているが、行政評価をやっていくにあたってめっちゃめっちゃやるわけではないし、僕らの仕事だからやらないといけないことはやらないといけない。そういう言葉には違和感がある。

梅村委員：もちろん私の個人的な気持ちで言っているわけではなくて、今までに出てきた議論でそういうのがあったということで今一度視察で見に行きましようという流れになった、そこで出た言葉として使っているわけで、当然必要に応じて資料はつくってもらわなければならないと思う。

大野委員：7月いっぱいでは原案はできていて、三役説明の承認を得る状態。7月いっぱいでは実はできている。我々のところに来るのが10月に全員協議会とか、遅いと11月の全員協議会とか。終わった後に来ても評価の対象にならないので、事前に抽出して、事前に10個以内だったらチェックは受けられるので、誤字脱字がないか程度の確認はしていただいて議長の下でいただくという形なので400の事業や施策をやろうということではないので、職員に負担がない程度の10項目程度以内で評価するということは負担があるわけではない。

関戸委員長：17日に飯田市への視察を行うことになっている。視察の後にもう一度開催するが定例会の前なので、定例会中の予備日が良いのではないかとと思うが皆さんのスケジュールはどうか。また、今資料の話が出たので、今までの経緯について調べていただいて皆さんに事前に渡すようにする。8月17日前にお渡しできるようにさせていただくということによいか。

大野委員：9月定例会の予備日の時点では、もう決算審査は終わってしまっている。8月20日の全員協議会の後とかで集まらないと項目抽出ができないまま進んで行くので、それでは今年度はもうやらないというのと等しいと思う。

堀委員：そのとおりだと思う。要は、試行といえども9月の決算議会に向けての取組なので、決算議会にこの取組を反映させないと意味がない。

梅村委員：イメージが湧かないが評価シートの話など出てきた。これらを活用してどのように展開していくのか。例えば、健やかタクシーについてはどのよう

に進めていくのか。

大野委員：85歳以上の方にはすべて月2枚、老人クラブ連合会を通じて配布されるが、場合によっては窓口でも配布されているが、85歳以上の全利用者の中でどれくらい使われているのか、一定の方が使っているのか、どんな方向に使っているのか、あれ実は市内だけではなく愛知県内どこでも使える。そういったところでこういった部分で使われているのかはたぶん当局も全く評価していない。そういったことをもうちょっと、例えば、こういった部分で評価できるように努力しなさいとか、実は、デマンドタクシーよりも健やかタクシーの利用者が同じくらいいる。実は年間。そういったところで、こういった部分で費用対効果があるとか。そういった部分をみんなで話し合っ、分析していくことが大切。評価項目について、この角度から評価するという考え方がある。執行機関ができていない評価の角度を提言したりできる。

堀委員：各議員は、決算議会に向けて個人や会派でヒアリング等により情報収集して決算に向かうので、個人の得意分野や興味のある分野についてはすでにやっている。それを議会の機関として、常任委員会という組織として共通認識を持ち、最終的には議会として提言できるような形が望ましいが、そこまではなかなか行き着くことは難しいと思う。各個人がやっていることをちゃんとしたデータなり紙面に残してきちんと分析しましょうということ。考えていくことも重要なことである。

大野委員：議員個人の力ではなく、議会力を上げていくということで行政評価というものをやる。みんなで知って上げていくということで、また改善を求めていければいい。それが提言なのか改善を求めるところを議会としてまとめていくというのが、議会力を上げるひとつの制度評価のあり方だと思っている。

梅村委員：良いと思う。それがなかなか見えてこなかったの。自分なりにこうするという考えはもちろんあるが、そういう流れがあるということでそれぞれ各自が調べて、意見を交わしながら議会の意見をつくっていくということで予算に反映するようなものと理解した。

須藤委員：先ほど堀委員が、今回の決算で間に合わないと言ったが、そうすると議案書が配布されて、主要施策の成果報告書もあるのでそれを見てからスケジュールを立てるとのことか。

堀委員：主要施策の成果報告書はもうほとんどできている。担当部署のグループ長とも委員会の中でずっと話してきているが、今やっている政策評価は10月ぐらいにしか出てこない。しかし、それは市長決裁が終わった成果物としては10月だが、仮の段階のものはもっと前にできている。それも議会に提出してほしいと何度も僕は個人的には言ってきた。それは考えるという答弁だった。

今回、議会がやろうとしているのは、施策評価ではなく、より細かい部分の事務事業評価を行うということである。市は、今は政策評価しかしてなくて、細かい事務事業に対する詳細なシートをつかって評価はしていない。だけど、成果報告書の中にはきちんと事務事業ごとにコメントが書いてあり、一定の評価をしている。しかし、その評価が甘いということもあって、議会としても項目を絞って事務事業評価にランクを落としてやっていくべきではないかということで、チームの検討結果の流れもあるが、なかなか難しいということもあって飯田市を見に行こうということで、こういった形が望ましいのかは暗中模索の段階ではあると思う。全体の流れとしては、さっき言ったように政策形成サイクルを活かすためにどうしていこうかというところで、決算議会が終わってからでは遅いというのは確実である。

大野委員：ちょっとわかりやすく言うと、決算議会の時に各議員で質問をしていて質問が集中すればいいが、違う質問に飛んでしまうとまた戻ってとなつて、議論が中断になってまた戻ってくるということがあるので、集中的にこの5つないし10個以内の中で項目を絞ることで集中的に審議していきましょうということを決めるということの項目である。それで評価していきましょうということ。これは集中的にやるということを決めないと質問が飛んでいく。一議員が何問も質問項目を変えていくと、その質問で集中できない。だから、項目を絞って議員間討議も含めてやっていきましょう、評価していきましょうということで、それが上手くいけば提言に行きましょうということになると思う。

梅村委員：会議中の審査にも影響してくるということか。そういうやり方をしようとしているということ。

須藤委員：今、大野委員が言われたのは、委員会で質問して、質問をしながらそれをまとめていくというような感じに聞こえたが。

大野委員：ちゃんと僕は議員間討議と言ったが、ある程度質問をされる方もいるが項目を絞らないと話題が飛んでいく。また戻って、違う質問に行つてまた戻つてとなるのではなくて、まずはその項目を集中的にやっていくとかそういったことをやらないと政策評価、行政評価、事務事業評価ということにはならない。だから、最初は絞っていかないとできなくなるということ。

梶谷委員：9月議会の決算委員会の委員会の形態そのものが変わっていくこととなる。

大野委員：事務事業評価を事前にやればいいが、実際は予備日を使うかどうかは、まだ飯田市にもいかなければいけないが、今までの3日間で終わろうという考えは、事務事業評価、政策評価、行政評価をしようとする質問も多いので岩倉市議会とするとちょっと厳しいと思う。

梶谷委員：時間的にというよりも形態の問題。

(音声不明瞭)

堀委員：私のイメージではあるが、事務事業評価でこういった協議会なり委員会で話をする。それで委員間討議と言うか意見交換してこの項目の方向性はこうだということがまとまれば、それは委員会として政策提言などのかたちで、決算議会で委員会代表質問みたいな形になると思うがなかなか至らない。そうするとやはり各個人の質問、質疑でどうなるのかという基礎資料として事務事業評価のシートが活かされると思う。今までは各個人でもってだったが、執行機関側からすると各会派や各個人から聞かれると全員協議会と同じで二度手間三度手間である。それをやはり機関としてデータを出してほしいと言って出てくれば、ここでの議論の素材にもなるし、質問の時の論点整理にもなるという効果があると思う。

木村委員：ちょっとモチベーションが上がらない。というのは、6、7年前に飯田市や田原市を視察しているが、既にやっている議会が言ったようにそういう政策提言まで結び付けたとしてもそれが反映できるかどうかといったところはなかなか難しく、当局側は真摯に受け止めるものという言い方をしますが実際にはどうなのかという問題点がある。そういうところが改善しているところが見えてくれば、少しモチベーションが上がってくると思うが、常に決算などの議会では、個人ではやはり研究しながら質問していると思っているので、それを全体でやるというのはひとつの方法なのかなと思う。なかなか自分の中で方向性が見えないのでモチベーションが上がらない部分がある。どうしたものかという思いがあるが、やってみるということならそれでいいけれど、かなり労力があることと思う。

堀委員：先日の早稲田大学のサミットのところで、可児市議会の川上議長が言われていた委員会代表質問に対する効果について、この財務常任委員会の事務事業評価が政策提言になるかどうか、理想像として考えていただきたいが、それぞれ総務・産業建設常任委員会、厚生・文教常任委員会の代表質問をやった場合に可児市では満額回答だったそうである。やはり一般質問と代表質問とでは向こうの受け止め方は違うということがある。ただ、一般質問が軽視されることを危惧しているのは前回言ったとおり。

大野委員：財務常任委員会で提言した2項目、お祭り広場の排水機能と農作物に影響しないLED照明について、お祭り広場の件についてはもう設計に入っている。実際に試行的にやったうちの2つに1つが設計に入っている。そういった部分では、本当は100点満点が良いが80点でも70点でもどんどん議会側が提言していくということがこれから求められる姿だと思う。

関戸委員長：他に意見はないか。それでは、大野委員から提案があった8月20



日の全員協議会の終了後にもう一度集まるということでよいか。

(異議なしの声)

関戸委員長：8月20日の全員協議会の後にもう一度集まり、項目の抽出と進め方等々を協議したいと思う。その前に、17年度の資料と前にやっていたことの資料については事務局からいただき、皆さんに配布させていただきたいと思うがよいか。

(良いとの声)

関戸委員長：それでは、次回もう一度集まり、項目の抽出と進め方についての議論をさせていただく。

(2) その他

特になし

3 その他

特になし